

「俳句の小径」の村上霽月と正岡子規、そして鍵谷カナ ～昔の垣生の風景～

校長 玉井 啓二

本校の正門のすぐ西側に位置する「俳句の小径」について、7月17日号で紹介しました。この「俳句の小径」には、垣生に縁のある村上霽月や石田波郷をはじめ、松山が輩出した有名な俳人の代表的な俳句を記した句碑が設置されています。それらの中に、昔の垣生地区の様子を表した次の二つの俳句があります。

^{もず}朝鴉ニ夕鴉ニかすり織りすすむ 村上霽月

村上霽月は、伊予郡西垣生村（現、松山市西垣生町）の出身です。愛媛県第一中学校（現、松山東高校）で学んでいましたが、明治19（1886）年に上京し、その翌年には第一高等学校（現、東京大学教養学部）に入学します。しかし、叔父の急死により退学し、家業の今出緋株式会社の社長になりました。この頃から俳句に関心を持つようになり、明治25（1892）年頃から正岡子規や内藤鳴雪の指導を受け、さらに子規を通じて夏目漱石とも親しくなります。明治30（1897）年には俳誌「ホトトギス」に参加し、さらに今出吟社を結成するなど、郷土俳壇の重鎮として活躍しています。特に、漢詩から俳句を作り出す「転和吟（てんなぎん）」を創始し、伝統ある俳句に新しい境地を開きました。

この俳句の中の「鴉（もず）」は、秋の季語です。鴉は、キーイツ、キーイツと鋭い声で鳴く鳥です。明治から昭和にかけての垣生地区では、朝に夕に鴉の鳴き声を聞くことができたのでしょう。その一方で、伊予緋を織る機（はた）は休みなく動いています。当時の垣生地区一帯では伊予緋が盛んに製造され、特産品になっていました。霽月の俳句からは、鴉の鳴き声と伊予緋を織る機の音が一体になり、秋の澄んだ空気の中で響き渡っていた様子が想像できます。〈自然の営みと人間の営み〉が調和していた時代と言えるでしょう。

^{むくげ}花木槿家ある限り^{はた}機^{はた}の音 正岡子規

明治28年10月7日、正岡子規が人力車で今出（現、松山市西垣生町）の村上霽月を訪ねています。その日の記録である「散策集」に、「ここは今出鹿摺とて鹿摺を織りだす処也」とあり、「夕風や瘦せて花なき木槿垣」の俳句と並んでこの俳句が出ています。また、子規句集明治28年秋の部にも、「今出村二句」としてこの二つの俳句が収められています。

この俳句の中の「木槿（むくげ）」は、秋の季語です。アオイ科の落葉低木で、7月から10月頃、淡紫・淡紅・白色などの花が咲きますが、朝方早くに開き、夕方にはしぼんでしまします。「夕風や」の俳句から、子規が見た木槿は、海風を受けるために生長がよくなかったことが想像されます。そのような中で咲いている木槿の花には、薄い色合いと相まって、はかなさが感じられたことでしょう。その一方で、木槿の垣根越しに、伊予緋を織る機の音が聞こえてきます。「家ある限り」という語から、どの家々からも力強い機の音が聞こえてくる驚きがよく表れています。そして、霽月の俳句でも表されていた〈自然の営みと人間の営み〉の調和とともに、〈（花の）はかなさと（音の）力強さ〉の対比が、わずか十七音から感じられます。

最後に、今回取り上げた二つの俳句に共通する伊予緋の創始者、鍵谷カナを紹介します。鍵谷カナは、天明2年（1782年）、伊予国伊予郡垣生村今出（現、松山市西垣生町）に生まれました。農家に嫁ぎ、副業として伊予縞の布を生産していました。享和年間（1801年～1804年）に、新しい緋模様を考案したり、それまで青草の汁で染めていたものから藍染めに変更したり、織屋の菊屋新助が考案した高機を使って織り出したりと、自分の力で考え、工夫を重ね、ついに今出緋を完成させました。これが後に伊予緋となり、伊予の特産品として人気を博すようになります。ちなみに、本校の校訓「考える」は、このような鍵谷カナの研究心・創造力にあやかって決められたものと言われています。

【参考】 四国・愛媛 俳句の里 松山

創立百周年記念誌「垣生」垣生小学校

